

私は昭和22年（1947）12月、戦後の住宅難、食糧難の最中に、叔父の会社、宮本製靴に、19歳の住み込み店員として入社した。当初から年下の先輩に負けるものと、心機一転、頑張るしかなかった。会社の製品は婦人靴で、甲革も本底もすべて、皮革を使用していたから、オール手製の高級靴であった。

当時は価格も製品も統制時代であったから、取り扱い自体が闇商売であった。皮革製品が、自由に引き取りできるようになったのは、昭和25年（1950）からである。銀座数寄屋橋交差点角に、小売店があった時、一度だけ、経済警察の手入れを受け、一足残らず没収されたことがあった。ウィンドーの靴が目立ったのであろうか。ヒール物の婦人靴は、一足4,800円ぐらいで、当時の事務員さんの給料が3,600円ぐらいだったから、靴は高嶺の花の商品だった。

当時は新入りで、まったく業界の状況も分からなかったから、婦人靴の生産革命ともいべき「接着製法」（セメント方式）の胎動が始まっていたことも、よく分からなかった。宮本製靴の場合どうだったのか、一年先輩のメモ書きが残されているので、それを収録してお

きたい。

「昭和25年頃、必要に迫られ、セメダインのような接着剤があって、それを底貼り用に使った。合成底については、昭和26年、工業試験所から大学を紹介され、大岡山の工業大学の教授に会い、持参したサンプルがネオプレン系で、日本ではまだ工業化されていない製品との評価を受ける。合成底の代用に、理研ビニールも試用してみた。米国のグッドイヤー用の接着剤が、丸の内の有楽産業で輸入販売していると聞き、現物を見に出かけた。溶剤はメチルエチルケトンだった。」とある。

写真は『シューズワールド』別冊'70靴用機材カタログ集（昭和44年版）リーダー機械株式会社の広告頁

製靴機械のデパート

<Model K63> イタロー・セリム社 トーラスター
 <Model 282> 油圧式 履物成形機
 <Model 701 SRMC> イタロー・シグマ社 パウチフィング アイロニングマシン
 <Model 882> 厚底靴毛処理機
 <Model 127P/C> イタロー・シグマ社 油圧式自動靴底圧着機
 <Model No. 1070> 羽田プロト社 インクジェット式底付機（2巻式）
 <Model 127P> 厚底靴毛処理機（セミイデン）
 <Model 545> イタロー・シグマ社 全自動油圧式ベッド式トーラスター
 <Model 1224> カルゼーラ 油圧式・セミイデン ヒールシートラスター
 <Model 1891> エニセター ヒールシートラスター
 <Model 14C> 西條・モルマック社 厚底靴毛処理機
 <Model 690> 自動圧着機
 イタロー・グスロー社 インクジェット式自動インクジェット（6ステーション）
 <Model 891> セメント的成形機 カンボリアン
 <Model 892> ステップ サイドラスター
 <Model K58TP> イタロー・セリム社 油圧式ヒールシートラスター
 <HUMISET 412C> 英国中島ボソン・マーン社 ワミセット モイスト ヒートセーター
 <Model 420B> 集塵機
 <Model 671> ゴム添加圧着機
 <Model 286> イタロー・フォイマック社 油圧ヒール打撃機
 <Model 497> 自動底付機
 (西條)モリス社、フォーチュナ社・デント社、カルロ社、モルマック社、プロト社代理店
 (イタロー)シグマ社、セリム社、アトム社、フォイマック社、グスロー社代理店
 (デンマーク)ベダルセン社代理店
 (イギリス)オールドマン社・スタンダード社代理店

リーダー機械 株式会社